



平成16年賀詞交歓会挨拶

(社)日本技術士会神奈川県技術士会

会長 小川 浩

本日はご多忙のところ平成16年度の賀詞交歓会にご出席いただきましたことを感謝申し上げます。

昨年は皆様のご協力によりまして、本会はこの経済不況にも係わらず、無事事業を遂行できたことは、偏に皆様のご努力の賜物と深く感謝致しております。

昨年は本会も継続事業として、技術士試験を神奈川の地で行なったこと、ビジネスオーデイションを中小企業センターと協働して開催したこと、パシフィコ横浜でテクニカルショウよこはま2003 また、震災対策技術展で講演会・展示会を、更にKSPではテクノトランスファ - 2003 inかわさき、おおた工業フェアなどに参加し、当会の位置付けを多くの方々に印象付けることが出来たと確信しております。しかし残念ながら、本会の財政的状況は予断を許さない状況が平成16年度は多く、従って事業の見直しを余儀なくされています。この点は総務委員会にお願いしまして、事業の見直し作業をして頂くこととなります。

産業界も明るい兆しが見え初めてきましたが、しかし、確たるものとして受け止めるには十分ではなく、産学官での協働化を更に進めることが技術立国として必要ではないでしょうか。

特に技術開発には知性と感性をとともに養い、世界に先駆けた斬新な研究と技術開発が求められています。

そのためにも我々会員が専門的立場を理解しあい、複合化した新しい技術文化を作りだ



し、各専門分野を集合した幅広い技術集団を確立することが必要と思います。そして、刻々変化する社会状況を柔軟に取り入れた産業の全体像を描き、企業への技術支援を心がけることを本年の目標といたしたいと思っています。

今年も皆様と共に更なる発展と一層のご支援と御協力を年頭をお願いすると同時に、皆々様の発展とご健勝を祈念いたしまして、新年のご挨拶と致します。

神奈川県技術士会 平成 16 年賀詞交歓会 報告

1月23日(金)、県民ホールにおいて、(社)日本技術士会神奈川県技術士会の平成16年賀詞交歓会が盛大に挙行された。当日の会員参加者は63名、来賓は神奈川県企画部科学技術振興課、神奈川県産業技術総合研究所、神奈川県平塚商工労働センター、横浜市工業技術支援センター、(財)神奈川高度技術支援財団、かながわ企業化支援センター、(財)神奈川中小企業センター、神奈川県中小企業団体中央会、(財)川崎市産業振興財団、(財)藤沢市産業振興財団、横浜商工会議所、厚木市商工会議所、(株)ケイエスピー、日本起業家協会、(社)神奈川県産業貿易振興協会等(順不同)から17名の参加を頂いた。

橋本 哲之祐副会長の司会で、まず神奈川県技術士会小川 浩 会長より、平成15年度の各種事業の紹介をされ、日本経済に明るい兆しが見えはじめたが、中小企業の活性化がさらに必要であり、神奈川県技術士会の果たすべき役割は、大きいと述べられた。20部門の専門家集団の知恵を結集し、関係官庁機関と相協力して、神奈川県の新しい企業の育成と発展に力を尽くしたいと結ばれた。

続いて来賓の神奈川県企画部科学技術振興課 盛田 謙二課長より、神奈川県には、全国で1~2位の研究開発施設があり、大学や人材も多く、産業の高付加価値化が進んでいる。明るい兆しが見えはじめ、更に活性化が必要である。人・物・技術を活かした産業の創出と再生、産学連携による科学技術の向上を目指したい。神奈川県技術士会のお力を今後ともお借りしたいと述べられた。

次に企画委員長長の武藤 文男理事に司会を交代して講演会に入った。

特別講演

「神奈川県の製造業の技術力について」

神奈川県産業技術総合研究所

副所長 馬来 義弘 氏

- (1) 産学公連携による技術立県をめざして
神奈川県内の研究開発機能の集積状況、研究開発拠点の動向、研究開発主導型の



産業構造、コディネータ会議の発足と論点について述べられた。神奈川が保有する技術全体のマネジメントが必要なこと、技術・経営評価システムの確立の必要性、技術士クラスの人材の確保・養成が必要と力説された。

- (2) 神奈川県産総研「ものづくり技術支援強化3年3倍増活動」の紹介

産総研の概要、組織体制、機関評価結果、技術支援強化活動の目標と実績について数値で示された。産総研の心構えとして、お客様満足最優先を第一とし、神奈川製造業の技術力強化の一翼を担っていきたいとの決意を述べられ、神奈川県技術士会の皆様の絶大なご支援・ご協力を！で締め括られた。

民間に開かれた産総研を目指し、日産自動車(株)中央研究所ご出身の演者をリ・ダにすえた新戦略は着実に実を結びつつあるように見えた。

会員発表

(1)「萌芽技術評価とIPTTグループ」

機械部門技術士 三宅 勇次

神奈川県技術士会知財センターの7人(三宅、樋口、田中、肥沼、平田、藤井、西本)によって、約2年かけて、R.ラゲイツ著「ア-リ ステイジ知財 技術・リスク・



交渉・価値評価」を翻訳し、中央経済社より、2004年3月出版の運びになった。

全480ページで、価格は¥5,000～6,000位となる。この出版に至るまでの苦労話、裏話を披露された。ア-リ ステイジ知財の意味、ライセンス、評価方法、価値評価、心理、技術ライセンスのシ-ズ、IPTT(Intellectual Property Technology Transfer) グル-プの活動、本の目次と内容等について解り易く説明され、大変有意義であった。

(2)「小型モ-タに関する生産技術の動向」

巻線技術を中心に

機械部門技術士 岡安 宏真

小型モ-タは、産業用機器、家電製品、自動車、情報機器等をはじめ、多方面で使用されており、生産量も非常に多い。生産工程中、最も工数を要するのは巻線作業である。この巻線技術を中心に、生産技術の動向について述べた。

内容として、小型モ-タの種類と課題、生産技術の動向(人手作業中心、直巻き、コイル・インサ-ト方式、コア分割方式)について詳細に解説された。

まとめとして、小型モ-タは100年以上前から使用されている製品で、成熟製品の代表のように思われがちだが、用途に応じて

各種のものが開発されつづけている。モ-タの小型化、高性能化が進んでおり、又コア分割方式などの技術革新も目覚ましい。生産の海外シフト化が進んでおり、マブチモ-タのようにオリジナルな専門メ-カ-は、世界中に展開し、高収益を挙げている。日本独自のオンリ-ワンの製品開発が今後益々必要であると感じた。

(3)「技術者のふみあと」

化学部門技術士 井筒 和一郎

井筒氏は本年80歳になられるが、現役の技術士としてお仕事を続けておられる。

ご健康で頭脳は冴え渡っている。私たち技術士のお手本となる先輩と言えよう。

東京ガスに40年勤務され、55歳で技術士となられ、技術士生活25年という。職人気質の根っからの技術者で、数々の研究業績には頭が下がるのみである。



技術開発事例として、酸素富化ガス発生炉によるアンモニア合成ガス製造プロセスの実用化(1950～1951)、石炭乾留ガス液より高純度酸化ゲルマニウム回収技術の開発(1953～1957)、成形脱硫剤による燃料ガス脱硫技術の開発と実用化(1957～1961)、都市ガス付臭剤及び付臭技術の開発(1957～1958、1967～1971)について述べられた。

多くの研究開発を手がけてきたが、研究を成功に導くためには、先ず化学の基礎をしっかり勉強して身につけておくことが大切であると言われたことが印象的であった。

閉会の挨拶

内藤 重信広報委員長より、閉会の挨拶が述べられた。

昨 22 日(木)TSUNAMI(ツナミ)の創立 3 周年を祝う会合がパシフィコ横浜のアネックスホールで行われた。7,000 円の会費にも拘らずベンチャ - 企業を含む会員 700 人ももの出席があった。その席で松澤 成文県知事より「神奈川より明日の日本を支える技術や企業を生み出したい」との決意表明があった。

本日、ご来賓の県科学技術振興課の盛田課長のご挨拶や産総研の馬來副所長のご講演にも述べられていたように、今年の夏には具体的な県の施策が纏められる。

神奈川県技術士会も産官学をバックアップする立場でもあり、新たな技術革新の波を適格に捉え、こうした県の新しい動きの中に参画して行けるよう、日頃の活動にそうした視点が大切である、と述べられた。

最後に本日のご講演の方、ご来賓の方、会員の方々への謝辞が述べられ、本年の賀詞交換会・講演会を無事終了した。

(文責：化学部門技術士 藤田 稔)

【広報委員会からのお知らせとお願い】

- 平成 16 年度 (社)日本技術士会神奈川県技術士会 総会にむけて -
- ・本年度の総会の開催日程、場所が、6 月 22 日 13 : 00 から、神奈川県民ホールと決まりました。各委員会やプロジェクトセンター - の各チームでは、平成 15 年度の活動報告及び平成 16 年度の事業計画と予算の作成 議案書作成等その準備に向けて、励んでおられると思います。
- ・広報委員会では、これら議案書等の発送に併せ、総会特集号を作成する予定で準備を開始いたします。その中で各委員会やプロジェクトセンター - の各チームの抱負や PR を掲載しようと思っています。後日、メールで依頼いたします。
- ・何処にも所属されていない会員諸氏は、会の活動、会報等、ご注文/ご意見がありましたら、4 月末日までにお寄せください。この場合の記事の取り扱いについては広報委員会に一任させていただきます。

(社)日本技術士会神奈川県技術士会 賀詞交歓会懇親会

平成 16 年 1 月 23 日(金)に開催された神奈川県技術士会賀詞交歓会後の懇親会は、賀詞交歓会会場である県民ホールの向かい隣のワークピア横浜ビル地階にある「ユーフォニー」で 5 時半から当技術士会副会長の大川治副会長の軽妙な司会で始まった。歌舞伎調の口上ではじまり、ご来賓の方々をご紹介の後、朱色の寿の文字も鮮やかな扇をかざして決めた後、当技術士会小川浩会長の開会の挨拶で懇親会が開会された。

ご来賓のご挨拶は、まず神奈川中小企業センターの市川保則企業化支援部交流支援課長から、「SBIR の業務等様々の業務の遂行に際して当会の支援を得ており、この支援で事業が遂行できている」とのご挨拶を戴き、次いで(財)藤沢市産業振興財団の栗山幹夫専務理事から「藤沢市長も産業の推進を大目標としており、また財団ではコンソーシアムの会員が 500 人を超えており、

技術士会の会員共々進めて行きたい」とのお言葉を頂き、更に、神奈川県企画部盛田謙二科学技術振興課長の「神奈川県及び我が国の今後の発展は、技術の進歩無くしてはあり得ない、本日出席の皆様方の努力をあわせて、神奈川県及び国の経済の発展をはかりたい」とのご挨拶と乾杯の音頭によりビールでの乾杯が行われ、懇親会の幕開きとなった。

その後、バイキング形式で多くの種類の料理、各種の飲み物、デザートを楽しみながらの会員同士の挨拶・会話、ご来賓との挨拶・歓談に楽しい時を過ごした。

7 時前頃、当技術士会北本達治業務委員会委員長の挨拶と一本締めで中締めとなった。



(写真説明)左から、小川会長、市川課長、栗山専務理事、盛田課長、大川副会長

第4回 公開研究発表大会の報告

ターの大会議室には、会員外の参加者3名、講師陣を合わせ29名が集まった。

武藤企画委員長の司会により、小川会長のご挨拶を戴いた後、新日本石油(株)川勝健氏の特別講演「高分子電解質形燃料電池の概要」から始まった。

燃料電池自動車は既に街を走っているが、



心臓部の電池の方は果たしてどこまで進んでいるのか、川勝講師はその現状と課題を中心に判り易く解説下さった。

今回の会員発表は環境・クリーンエネルギー関連テーマが2件となったが、岡田会員、坂本氏らの開発された技術は、従来捨



てられていた焼却飛灰を資源化するもので、



また、岡野会員の発表は自宅に設けられた太陽光発電システムの稼働体験をベースにしたもので、太陽光発電システムの生理ともいべきものを解らせてくれた。

吉川会員の道路凍結センサーの発表は光センサーを利用したシステムを開発する場



合、如何なる点がポイントになるかを提示したもので、産業に、生活に広く用いられている光センサーのこれからの可能性を印象付けるものであった。

締め括りの植村会員の発表は、最近巷に喧しいナノテク技術をジャーナリスティックな見方ではなく、如何に正しく捉えるべきか、その意義から考察されたスケールの



大きなものであり、ポリマー技術との関わりを多くの実例で紹介された。

今回はどの発表も、講師ご自身の永年の積み重ねから生み出された重みのある内容で、聴講者からは熱心な質問があり、討議も行なわれた。

技術士会の催しとしてまことに相応しい、有意義な大会であった。

(文責 三浦幸一郎)

テクニカノレショウヨコハマ 2004 (第 25 回工業技術見本市) 出展

神奈川県下最大の工業技術・製品に関する、総合見本市「テクニカルショウヨコハマ 2004」は、今年も去る、2月4日(水)、5日(木)、6日(金)の3日間、パシフィコ横浜展示ホールC・Dで開催されました。当、神奈川県技術士会からは、恒例により、環境マネジメントセンター(EMC)、ISO9000センター、起業家支援センター、知財センターの4つのプロジェクトセンターが参加し、技術士会活動の活性化に貢献する事が出来ました。

今回は、「夢と未来、支える技術」をテーマに、県下最先端の技術情報が一堂に会され、業界の枠を越えた情報の発進・収集・交流が行われ、25回目の開催に併せ、上海企業の特別出展、TSUNAMIベンチャーフェアが加わり、従来より規模が拡大されての開催でした。事務局発表の入場者数は、1日目:12,151人、2日目:11,745人、3日目:12,917人、合計:36,813人と言われています。

出展した、4つのプロジェクトセンターは、取り纏めのEMCを中心に昨年10月より、打合せの会合を持ち準備を進めました。開催期間中は、約20名の会員が、交代で夫々の役割を分担、来場者への対応を図りました。神奈川県技術士会の小間(ブース):No203への来場者は、1日目:22名、2日目:25名、3日目:23名、合計70名、又、3日目午後のセミナー出席者は名刺を戴いた方で41名を数えました。合計しますと、110名余の方々、我が神奈川県技術士会のプロジェクト活動に関心を持って戴いた事になります。

小間(ブース)での関心は、神奈川県技術士会の活動内容であり、ISO認証取得では、他のコンサルタントとの違い(技術・価格)であり、化学物質管理改善に関する県との連携にも興味が窺がえました。



他に、起業家支援への期待、知財プロジェクトへの共同対応等への関心も見受けられました。特に、セミナーのテーマ「見直し気運が高まってきたISO認証」発表者:岡田氏、尾立氏は、お困り・お悩みの企業担当者への関心と呼んだと聞いております。

今後共、神奈川県に技術士会ありとのメッセージを発信し続けて行く為にも、努力を続けて行かねばと思います。「持続的社會への貢献」を目指し、プロフェッショナリズムの修得、エコ知識の習得、倫理の修練、ボランティアの実践、等が望まれます。夫々のプロジェクトセンターの活動・活躍に期待します。以上

(文責 奥村 貞雄)

第8回 震災対策技術展報告

阪神・淡路大震災の反省に立って、第1回震災対策技術展が神戸市で開催され、今年で第8回を迎えた。当初、神戸市単独の開催であったが、第6回から神戸市会場に引続き、横浜市にも会場を移して、開催されるようになり、従って横浜会場としては、3回目となる。

今年は、会期・場所とも、テクニカルショーヨコハマ2004と重複させるように、2月5日～6日の2日間に設定され、シンポジウムの部(2月5日のみ)と、展示会場における展示を通して、(社)日本技術士会神奈川県技術士会の知名度向上に繋がった。

今年の特長は、日本技術士会に昨年発足した、防災特別委員会と共催の形を採り、シンポジウム・セミナーの部に、展示場では展示者として参加し、技術士の活動ぶりを知らしめた。

シンポジウムの部では、内藤 重信広報委員長の司会で「テーマ：大震災救助特集 / 自助、公助、互助を考える」と題し、当会橋本 哲之祐副会長の挨拶に続き、防衛庁から第三部長 保坂 一彦氏、総務省消防庁から防災課長 務台 俊介氏、技術士会からは、防災まちづくりを中心に、工学

博士 三船 康道氏の3氏がそれぞれの立場でアネックスホールを埋めた200人を越す参加者に訴えた。

展示会場では、2日間で7,500名の来場者があり、技術士会のブースでは、秋元技術士事務所からの免震装置モデル、防災特別委員会からの尾鷲湾に津波襲来を想定した津波シミュレーション画像の放映や北海道支部・東北支部からの昨年経験した地震による被災状況写真、都立大・岩楯研究室からの地震解析モデル、横浜地方気象台及び神奈川環境技術研究所からのパネル展示等あり、盛大な2日間であった。

(文責：内藤 重信)

編集後記

年末年始から年度末にかけての当会の主要行事の報告号となりましたが、2月中旬から下旬にかけての「おおた工業フェア - 」と初参加の「町田市テクノフェア」についての報告は、紙面の都合で、次回5月発行予定の「総会特集号」に廻すことにいたしました。ご期待ください。

(広報委員長)